

# 2023年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

国内体験学習プログラム

福島スタディツアー

「福島の“今”を見、福島を生きる人々の言葉を聴き、  
そして“自分”を見つめる」

<b>■参加学生</b>	
井原 壮琉(文学部 2年次生)	藤井 瑞季(文学部 2年次生)
坪久田 さくら(経済学部 2年次生)	吉川 鈴之助(経済学部 2年次生)
小林 峻明(法学部 2年次生)	北村 尚暉(社会学部 2年次生)
蔵本 千優(社会学部 2年次生)	土屋 朝揮(農学部 2年次生)
深堀 綾香(農学部 2年次生)	大久保 桜(文学部 1年次生)
佐藤 美月(文学部 1年次生)	安田 心(先端理工学部 1年次生)
中矢 柊成(社会学部 1年次生)	細見 恭大(社会学部 1年次生)
松浦 晴香(社会学部 1年次生)	田中 あかり(心理学部 1年次生)
<b>■テーマ</b>	
～福島の『今』を見、福島を生きる人々の『言葉』を聴き、そして『自分』を見つめる～	
<b>■企画・引率</b> 筒井 のり子(社会学部 教授) 國實 紗登美(ボランティア・NPO 活動センター ボランティアコーディネーター)	
<b>■協力者・団体</b> 特定非営利活動法人うつくしまブランチ、特定非営利活動法人 さぼーとセンターぴあ、 社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会、阿部農園、農家民泊いちばん星、俺たちの伝承館、F スタディツアー、 原子力災害考証館 furusato	

## 1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が、該当地域の地域住民やNPO/NGO との交流を通じて、国内におけるその地域の抱える問題に触れるとともに、ボランティア等の体験学習を行うことにより、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自身の問題として考えるきっかけを作ることを目的としています。

「福島スタディツアー」は 2015 年に開始し、以降、福島県の NPO 訪問や地元住民との交流、町のフィールドワーク等を通して、津波・地震・原子力災害という複合災害が引き起こした課題と、そして課題解決に向けて市民がどのような活動を展開してきたのかなどについて、実際に現地を訪問して体感的に学びました。

## 2. 概要

### (1) 事前学習会

2024 年 2 月 7 日(水)

- ・東日本大震災～福島の様況について～  
筒井のり子社会学部教授のお話
- ・参加に関する説明及び参加者自己紹介

### (2) スタディツアー

2024 年 2 月 17 日(土)～2 月 20 日(火)

1 日目 2 月 17 日(土)

朝、京都駅を出発し、新幹線で福島市へ。

到着後、オリエンテーションの後、特定非営利活動法人うつくしまブランチの方よりお話を伺いました。

2 日目 2 月 18 日(日)

午前：福島市内の阿部農園を訪問。梨農園を見学しながら、安全なものを提供するための努力

や、農業の楽しさ等についてお話を伺いました。その後、浜通り地域へ移動。

午後：東日本大震災・原子力災害伝承館と震災遺構浪江町立請戸小学校および大平山霊園を見学

3 日目 2 月 19 日(月)

午前：南相馬市内のフィールドワークで、車窓見学およびロボットテストフィールド、俺たちの伝承館、大悲山の石仏を見学しました。

午後：社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会の方々との交流プログラム。震災当時の社協の葛藤のお話や震災当時を含む長きにわたり民生委員をされていた方の体験を伺いました。また、「防災・減災プロジェクト イザ!カエルキャラバン」の一部を体験させていただきました。

4 日目 2 月 20 日(火)

午前：F スタディツアーの案内のもと、富岡町の慰霊碑や漁港を視察し、夜ノ森地区を歩きました。その後、大熊町の災害公営住宅や交流ゾーンがある地域を車窓視察しました。

午後：いわき市へ移動し、「原子力災害考証館」を見学し、館長の里見さんのお話を伺いました。その後、ふりかえりを行い、特急及び新幹線を乗り継いで京都へ。

### (3) 事後学習会

2024 年 3 月 5 日(火)

スタディツアーから帰ってきて改めて考えたこと、取り組んだこと等について一人ひとり発表して共有した後、報告会で参加者に伝えたいことについて話

し合いました。

### 3. コーディネーター所感

今回のツアーでは、「俺たちの伝承館」を初めて訪問しました。原子力災害のことをアーティストが自由に表現し、それを見る人が自由に受け止めることができる場所でした。芸術は理解するのが難しいと思っていましたが、自分が思うように捉えたらよいというお話を聴いて、気持ちが楽になりました。同時に、芸術に限らず、人それぞれの表現方法があるんだということを改めて考える機会となりました。体験学習プログラムの特徴は、参加する学生の学部や学年が多様であることだと思います。今回は、1,2年生が参加していましたが、

学生がそれぞれの専門や興味関心に沿って、見たこと聞いたことを日々のふりかえりで語ってくれていました。そういった語り一つ一つを否定することなく受け止め合うということも同じではないかと感じました。福島複雑な状況について学び考える機会になったのはもちろんですが、日々の生活やこういったプログラムのあり方についても考える機会をいただきました。

このスタディツアーは、多くの方のご協力のもと実施できています。お忙しい中、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

〈報告者：國實 紗登美

（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

私はこのツアーを終えた直後、原子力発電所は安全性が向上するまでは取りあえず使用を控えて、数多くのソーラーパネルも、これ以上増やすのはあまり良くないのではないかと考えていました。そして街の中にもっと自然を増やすべきだというように考えていました。しかし少し時間を置くと、本来は自然の中に街を作るという考え方が正しいのではないかと考えました。

今回の福島スタディーツアーに参加して、東日本大震災は一言で言い表すことができない災害だと感じました。里見さんの話を聞いて、東日本大震災は自然災害と人災が混ざっているということを知りました。自然災害は本当に防ぎようのない事だと思います。しかし人災は減らすことができます。私は原子力発電自体は悪ではないと思います。問題はそれを日本という地震大国で行うことだと思います。原子力発電は資源の少ない日本にとって、とても魅力的なものだと言えます。その反面大きな危険性を孕んでいることも今回のツアーで学びました。青田さんの話にもあった通り、フランスなどのヨーロッパで原子力発電が盛んな理由は地震が少ないからです。そのため安全性は日本よりも高くなっています。このツアーを通して私たちは、原子力発電所は当時の安全対策のままではいけないことを学びました。

そもそも原子力発電所は電気を生み出すために作られたものです。そして電気は私たちがより豊かに生きるために使われるものであるはずで、里見さんは、人は自分の都合で生きていてその権化が原子力発電所の爆発だ、といった話をされていました。私はこの原子力発電所の崩壊は、豊かに生きるために作ったものが逆に生きづらくなった物の最たる例だと感じました。いまの日本は豊かさを求めるための人工物と自然のバランスが崩れていると感じます。

養老孟司氏<sup>※</sup>は「人のせいにするというのは都会の人間の典型的な特徴」と指摘しています。「沖縄へ昆虫採集に行ってハブに咬まれれば『仕方がない。バカなヤツだ』ですむけれど、東京でハブに咬まれたら、誰が放したんだという責任問題でしょう。都市では必ず背後に人間の行為があって、いまの子どもたちはそれにスッポリ浸かっている。」と説明しています。

人間はそもそも地球に生まれた生物の一つです。人間が人工的に作り出したものばかりに囲まれて生活をしていると、そんな当たり前のことさえも忘れてしまったのだと思いました。私たちは街に自然を増やそうと錯覚していますが、本当は自然の中に街を作っているのです。それほどまでにいまの日本は自然を破壊してしまっていると感じます。

※宮崎駿 養老孟司『虫眼とア二眼』(新潮社、2008・2、p60)

私はこの福島スタディツアーに参加して、本当に良かったと思います。私の大学で学んでいる分野は福島スタディツアーとは全く関係がないため、始めは一般的な知識でさえ真新しい情報でした。そして、様々な方のお話を聞いている中で、どれだけ自分が鈍感なのだろうかと痛感しました。事前課題として調べた際にたくさんの情報を得ることができたのは、やはり原子力災害伝承館とロボットテストフィールドでした。国や県が大々的に出している部分は目につきやすいのだと、帰ってきた今なら思います。しかし、行く前はインターネットで情報が得られない時点で、それ以上の情報を収集することは難しいため、自分の中でそれがすべてとなり、知ることを諦めていました。



いたるところに設置された太陽光パネル

福島スタディツアーの 4 日間は私にとってとても刺激的なものでした。様々なことが印象に残っていて短い文章ですべてを書き表すことができませんが、1 つ挙げるとすると「メディアでは表立って報道されることのない裏の事実」の部分がたくさん見聞きしました。例えば、スタディツアーに参加する前は、「再生可能エネルギー」という言葉に直面するとは思いませんでした。しかし、様々なお話の端々にも、4 日間で撮った写真にも太陽光のパネルの黒い影がありました。日常の生活に戻って以来、私に何ができるのか、何をすべきなのかと考えていますが、未だに消化しきれしていません。自身の目の前のことに追われ、あの 4 日間のよう

とはできていません。また、実際に現地に行き、お話を聞かせていただいた私たちとそれ以外の人では温度差があるのも事実だと思います。母にツアーの話をして、一番印象に残ったことをたずねると、6 号線沿いの「オープンできなかったケースデンキ」だと言われました。自分ではたくさん見聞きした中の些細なことだったので、母との感じ方の差に違和感を抱きました。

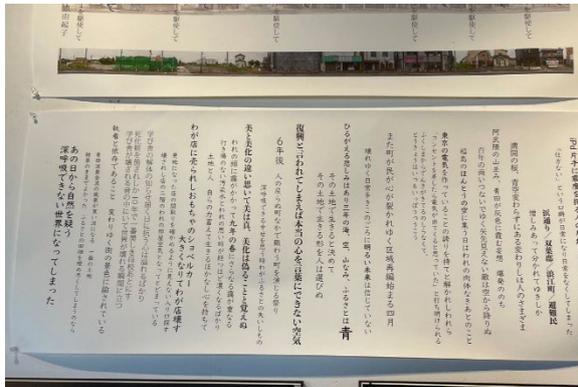
私はこのスタディツアーを通して、新しく知ったことや言葉がたくさんありました。それを自身のものであるとして考えたときに、以前、職場の上司にならった「謙虚に貪欲に」という言葉を忘れないでいたいと思います。私たちはすべてのことを現地に行って学ぶことも、すべてのことを知り尽くすこともできません。そのため、情報を伝えるメディアを私たちが上手く使う必要があります。これまで、幼い頃に起こったことでも、東日本大震災について何か知るきっかけがあったのに、見逃していたのかもしれないと思いました。スタディツアー以来、3 月 11 日に特集されていた記事や他の方が参加されていた宮城県のプログラムで訪れていた大川小学校についての報道など意識して情報を取り入れるようにしてきました。その中に考証館で見た木村紀夫さんについての記事を見かけました。汐風さんについての記事、また、外国人の死者数は数えられていないという記事にも出会い、情報を知ろうとすることですべては不可能だとしても知ることができる部分もあるのだと思います。



疑われることなく確かな信頼を得ていた原子力エネルギー

福島スタディツアーでは東日本大震災・原発事故の被害、復興に向けての取り組み、被災された方々の想いや願い等、非常に多くのことを学んだ。その中でも特に伝えたい、考えていきたいことが2つある。

まず、原発事故とこれからの原発だ。今回のスタディツアーで様々な手法、視点から原発事故について知ったが、特に俺たちの伝承館、中筋さんの「未来をみるには過去をきっちり見なければならぬ」というお話が印象的だった。福島に甚大な被害をもたらした原発ははまだ日本各地にあり、二酸化炭素削減、安定した電力供給を売りに推進されている。しかしその裏でふるさとを奪われ、家族、友人とも分断され、精神的、肉体的にも追い詰められている人々が居る。私たちは際限のない欲のその先にあるものを見つめ、考え直さねばならない。「絶対」など無い。自身が、家族が、友人が、被害者になってからでは遅いのだ。



「俺たちの伝承館の詩 三原由起子」

次に復興だ。私はツアーに行くまで、福島に対して除染が進み、家が建ち、人が暮らし、復興が進んでいる、そんな程度のイメージだった。しかし立ち入りできない町、復興の財源のためと乱立したソーラーパネル、復興アピールの為周辺だけきれいに除染された双葉駅、情報が切り取

られた公的な資料館、復興の現実を知れば知るほど、誰のための、何のための復興なのか分からなくなった。「復興と言われてしまえば本当の心を言葉にできない空気」これは俺たちの伝承館にあった詩だ。復興と騙り、都合の悪い出来事を隠し、切り取る。声を上げる被災者を抑圧し透明化する。そんな空気に無関心という形で加担していた事実が恐ろしく思ったと同時に反省した。また、復興は被災者の為、そして過去を未来に繋ぎ、活かすためのものであるべきなのだ」と強く感じた。

最後に福島スタディツアーは復興の現実を見て、多くの方のお話を聞き、様々な情報を知り学んだ非常に濃い四日間だった。しかしこれはゴールではない。ツアーで知り、学んだことでようやくスタートラインに立てたのだ。福島には被災し、復興してきた経験から声を上げ、忘れさせないようにと戦ってくれている人が居る。私も都合の悪い事実を隠し、風化させよう、忘れさせようとする力に抗える人でありたい。そのためにアンテナを張り情報を得て、自分の意見をもつこと。人に共有すること。節電や災害への備えなど小さくても行動すること。人は忘れてしまうからこそ繰り返し学び、考え、刻んでいかななくてはならない。

自分は、この 2024 年の福島スタディツアーに参加し、大きな感想として2つのことを以下に述べたい。

1 つ目は、原発に対する認識のイメージがツアーに参加する前と後で大きく変わった点である。自分は、ニュースや学校の授業などで、2011 年の原発事故以降、原発のことに関する記事や話を聞く機会が何度かあった。何となくのイメージとして、事故の被害リスクが凄く高いが、発電の効率性や生産性が高いため国が進めている発電方法という認識しか持っておらず、自分で関心・興味を持って調べることも特になかった。言ってしまうと、このスタディツアーに参加したのも、福島や原発に対し、特別な興味・関心があった訳ではなく、何となく一大トピックとして、原発事故が自分が小さいときに起こったという当時者意識もあり、一度は知って考えてみたいという程度の気持ちであった。しかし、実際にツアーに参加してみて、原発事故を身近に体験し、それが人生のウエイトの大きな部分を占めている様々な立場の人たちの話を聞いていると、原発事故が語られる際に目にしてきた被害数字の裏には、その一人一人に立場の違った壮絶な物語があり、その感情全てを含めて、原発というものが孕むリスクの危険性を語るべきなのだと知った。故にまだ知らないことがたくさんあるけれども、現時点では原子力発電には自分は反対だと思った。

2 つ目は、与えられた情報以外の、隠された部分を想像することの重要性と難しさを感じた点である。これはツアーに参加していた学生のほとんどが一度は感想で口にしていたと思うが、ツアー内では特に、国が作った「伝承館」と、地元アーティストの方々が作った「俺たちの伝承館」を見てみて、その伝えようとしていることの大きさの違いに難しさを感じた。具体例を一つ

挙げると、先に国の作った「伝承館」に行き、次の日「俺たちの伝承館」に行ったのだが、前者を周っていた際、原発事故被害者の健康被害に関する不安調査アンケートが貼られていて、実際の被ばく被害は無かったのかなと疑問に思った。しかし、「俺たちの伝承館」を見ると、原発事故で被ばくした人たちの被害の訴えの彫刻があり、これは、「伝承館」が原発事故の最も大事な部分を、国がこれからも原発利用を続けるために、観覧者が原発に対して悪印象を持ちすぎないように、意図的に隠しているのかなと思い、少しの怒りとともに、凄く大きな恐怖を感じた。

自分たちはこのプログラムの中で、色々な角度から原発事故を見る機会が得られたからこういう風に考えられているが、ただ観光で「伝承館」だけ見るようでは、人間与えられた情報の中で考えるしかないから、その隠された部分に気づくことは凄く難しいと思うし。だからこそ政治的なマインドコントロールの効果は絶大で重要なのだと思うけれど、知っておくべきと思うことを他者の悪意によって知らないままにされてしまうのは、凄く酷いし、かわいそうなことだと思う。だからこそ多面的に物事を考えられるように、目に見えてない部分を想像する力をこれからも養っていく努力をするべきなのだと思う。

私は、今回のツアーには「東日本大震災に関する報道が少なくなってきた今、福島復興がどのようになっているのか、東日本大震災の教訓を踏まえ何かできることは無いのか」という二つのテーマを持って参加した。その中で、私にとって印象に残ったテーマが二つある。



福島県復興祈念公園(以前はここに街があった)

一つ目は復興祈念公園(原子力災害伝承館・請戸小学校)である。伝承館で見た被災前の復興祈念公園と現在の風景との違いに衝撃を受けた。震災前は学校・住宅があってという平穏な日常が一回の震災でここまで何もなくなってしまうのかと思い、そこに震災前までは街があったということが信じられなかった。私は、震災から隣県に住むものとして震災を知らなければならぬと思いインターネットで情報収集を行ったり実際に現地に行くなどして、震災を知ったつもりになっていた。しかし、今回のスタディツアーの中で行った請戸小学校の展示にあった“津波被害の後に捜索に入った人が、がれきの中から人の声がしたのに原発事故の影響で避難せざるを得なくなり、救助に入れば助かった人に背を向けて逃げないといけなかった”というのはどう言葉に表してよいのかわからないが、世の中にそんなことがあってよいのかという思いになった。その後発表された当時の放射線の拡散予想ではそこは放射線の影響は低く救助できた可能性があった。もっと情報が早く発表されたら助かった命も多かったことを考

えると、混乱しているときこそ情報の正確さや発表の迅速な対応が必要であると考えられる。

二つ目は、F スタディツアー(富岡町や大熊町の見学)・原子力災害考証館でのお話である。一度、全町避難したほど線量が高かった被災地域であるため、街づくりはあまり進んでいないと思ったが、新しい街ができていて復興が進んでいるように見えた。しかし、ガイドさんが仰っていたようにそこだけを見ると復興が進んでいると思われてしまうが、人がほとんど戻ってきていない。それなのに本当に復興しているというのか疑問に思う。街づくりが進んだから、避難指示が解除されたから復興というわけではないものと考えられる。また、考証館での里見さんのお話であった町全体を原子力災害を伝える場所として残すという方法もあったのではないかという考えは、何も付け加えることなく見たままを伝えられるので良かったのではないかと思った。



新しくつくられた街

今回の福島スタディツアーでは、東日本大震災に関して本当に深く学べたと感じる。実際に現地の人々の思いを聞いていると、報道はなかなかされないものの、今も見えないところで多くの悩みを抱えながら生活している人がいるのだと感じた。3.11から13年が経過し記憶が薄れつつあると感じているので、決して忘れてはいけないものとして周囲の人などに伝え続けていきたい。

福島県での東日本大震災の被害は宮城県での津波による自然災害の被害とは違い、原発によった人災の被害や影響が多く見られた。そして、その多くが初めて知ることであり、自分の中に答えがなく、理解しがたい問題が残った。そのこに残す。



今も残るバリケード

まずは、被災者の抱えた問題である。福島県では原発の被害を受けないように他府県へ避難した被災者と避難をしなかった被災者に分かれた。このことから、避難した人と避難をしなかった人で対立が起こった。避難をした人は避難をしなかった人に「逃げた家族」とされ、また、避難先では原発の近くにいたということだけで嫌がらせを受けた。避難をした子どもは学校でいじめられ、不登校になった子もいる。私はとても疑問に思う。なぜ何も悪いことをしていない人がここまで苦しめられなければならないのか。人間の知らないことへの恐怖心やそれを排除しようとする本能が露骨に出た。「もし原発事故が起きていなかったら、このような対立は起きていなかったのではないだろうか。また、もっと世間に原発の理解があれば、違ったことがあったのではないだろうか。」と考えた。そして、被災者が抱えた問題の中にはお金に関わることもあった。東京電力が原発により被害を受けた被災者に賠償金を出したのだが、場所によって金額が違ったのである。このことから多くのいざこざを生んだ。また、多額の賠償金をも

らった人は、元々送るはずだった人生と違う人生を手に入れた。

私はこのツアーが進むにつれて、原発がすべての根源であり、原発がなければよかったですのではないかと否定的に考えると同時に、我々が使う多大なエネルギーを作るには、やはり原発は必要なのではないだろうかと肯定的にも考えた。これが我々の抱える原発の問題である。東日本大震災が起こる前までは福島県でも原発を肯定的に考える人が多く、東京電力に就職することを目指す人も多かった。しかし、東日本大震災が起きたとたんに原発へ否定的な人が増え、東京電力に就職してただけで悪者扱いを受け、嫌がらせを受けた人がいる。我々は心に傷を負ったり、傷つけられた人を見ると、誰かを加害者として悪者にしたくなる。もちろん、正当な理由で訴えることは必要である。しかし、東京電力で働いていたからといって、嫌がらせをするなどの行為は間違っていると私は感じた。どのようなトラブルでも、感情で行動するのではなく、事実を正しく理解した行動を大切にしたい。



最後に、私は「消防官」を目指しているが、その「消防官」を目指す上でこのツアーで抱えた問題がある。それは「命を懸けて人を救うことは正しいことなのか。」という問題である。福島県では、命を落としてまでも住民を助けた人と、原発事故による強制退避で命を救えなかった人

がいる。私は多くの命を助けたくて消防官を目指している。しかし、自分自身が命を落としてしまえば、他の助けられる命が救えなくなる。また、自分の命も目の前の助けたい命と同様に尊いものであり、失えば悲しむ人がある。私はすべての人を救いたいが、これは不遜なのかもしれない。時には命を見捨てる選択もしなければならぬかもしれない。私はまだ自分の命を捨てる覚悟で人を救うような状況にあったことがない。そのため、実際にそのような状況になったときに自分がどのように行動するかわからない。この問題は生涯私の中に残り、考え続けるだろう。

これらの問題には答えがなく、そのためもやもやする。だからこそ、忘れずに考え続けることが大切であり、伝えていきたい。そして、これらの問題を他人事ではなく、「もしも自分が」と自分事にとらえられる人が一人でも多く増えることを願う。

2023年2月、私は同プログラムに参加し、初めて福島を訪れた。そこで語ってくださった様々な立場の方々一人ひとりの東日本大震災の中に、一括りにすることができる同じ「東日本大震災」はなかった。そうした初めて知る事実・情報の多さに圧倒されたことで、福島の実やこれからの防災が私の中で考え続ける存在になり、今回改めて福島を訪れてまた新たな考えや自分なりの気づきを得た。

今回のツアーの中でも前年度に引き続きお話を語って頂く方、訪れる場所があり、私はそこで、一度訪れただけでは自分の中で消化することができなかつた情報を改めて理解しようと考えていた。特に、福祉を学んでいることもあり「さぼーとセンターぴあ」の青田さんが語ってくださった障がいのある方や高齢の方の避難の方法や事実を改めて理解したいと考えていた。今回も青田さんが語ってくださったのは、震災当時残された、逃げるができなかつた人々たちについて。誰もが被災者、だからこそその中のさらに見えないところで弱い人たちが一番苦しむ。それは、避難しなければならぬ状況の中で多くの障がい者、高齢者、その家族らが「避難所に向かう」というハードルを越えることができなかつた事実が物語っている。なぜ避難所に向かうということにハードルがあるのか。自力での避難が難しい方を登録した避難行動要支援者名簿はあっても、その対象者を「動けない人」としか想定できていないのではないのか。発達障害のある子の親にとっては、避難所で子どもがパニックになってしまった時の周囲の目に対する不安を抱えられていた方もいる。見えない、漏れた人たちは本当にいないだろうか。

再びこのツアーに参加することで東日本大震災に対する理解を得ることができるのではないかと考えていたが、疑問やもやもやはさらに膨

らんだ。しかしだからこそ気づくことができたことは、東日本大震災のことを一度では分からないし、分かろうとするのではなく、東日本大震災の大きな部分を知った上で、その裏に隠れた一人ひとりの声があることを忘れず耳を傾けようとするのが求められているのではないかと考えることである。まさに、「東日本大震災・原子力災害伝承館」という立派な公的資料館から、「俺たちの伝承館」や「考証館」といった民間の資料館を自分の目で見てそれぞれの伝え方を体感することがその一歩なのではないだろうか。前者の伝承館は、東日本大震災の全容から、今後の福島の明るい未来に向かうテクノロジーを伝える。「わが店に売られしおもちゃのショベルカー 大きくなりてわが店壊す」民間の資料館は、立派な伝承館が伝える大きな事実からこぼれた、あるおもちゃ屋さんの女の子の詩を掬う。また、様々な立場の方々の生の声に私たちが耳を傾け、今の福島の街を福島の方々と一緒に歩く。

どの伝え方が正しいかではなく、様々な角度から事実に向き合いたい。そして、学んだことを将来やりたい仕事に繋げること。「過去を見た上で未来を考える」(俺たちの伝承館 中筋さんの言葉)を忘れないでいることが、私があともう一歩できることだ。



F ツアー 福島第二原子力発電所が見える富岡漁港を一緒に歩く。

私はこの福島スタディツアーを通して、現地で実際に見たり、現地の方々のお話を聞いたりすることでたくさんのことを学んだ。そして震災から13年経った福島が今どのような問題を抱えているのか知ることができた。私は大きく分けて「原発事故からの復興」と「次世代への伝え方」の2つが問題だと感じた。

まず「原発事故からの復興」についてだ。スタディツアーを通して原発事故は取り返すことのできない様々なものを奪ったと強く感じた。原発事故により地元を離れたたり、農業をやめたりする人がたくさんいた。また救えたはずの命もたくさん奪われ、地元の方々のコミュニティーも崩されていた。地元の方々の話を聞くと、原発事故をきっかけに地元に残った人が地元を離れた人を「逃げた」と感じ、住民の中でも対立が生まれてしまったという。また、損害賠償などお金をめぐる問題で人間関係が悪くなってしまったと語っていた。私はものの復興はできたとしても、人と人との復興は難しいと感じた。それでも地元が好きでその地で農業を続けて頑張っている方や、また地元に戻ってきたいと思っている方もいた。そういった方々の思いを受け止めて、地元の人たちが納得できる形で復興していくことが大切だと感じた。

次に「次世代への伝え方」だ。これは、南相馬市社会福祉協議会の方のお話を聞いて問題だと感じた。お話の中で「東日本大震災を経験していない人や覚えていない人が増えてきた中でどうやって伝えていけばいいのか悩んでいる」と言っていた。私自身も東日本大震災が起こった当時は小学1年生でありあまり覚えていない。そういった人たちにとっては自分事として考えることが難しく、現地の方々の思いが伝わりづらいのだと感じた。福島で起こった出来事や真実を伝えて、みんなに自分事の問題として考え

てもらったり、未来につなげてほしいと思ったりしている人がいる中で、私たちが同世代にここで学んだことを伝えていくことはとても重要なことなのだと思う。



南相馬市社会福祉協議会のみなさんとの意見交換

福島スタディツアーを通して、今現地の方々抱えている問題を知ることが出来た。これを他人事ではなく自分事として考えていく必要があると思う。私は社協の方が言っていた「もっと災害について本気で取り組んでおけばよかった」という言葉が強く印象に残っている。私自身も災害について本気で考えられていないなと気づかされた。ただ災害について考え続けることは難しいかもしれない。しかし災害大国である日本で生きていくうえで、災害は切っても切り離せない関係だ。先日能登半島地震が起こったが、いまだに避難所が難民キャンプのようになっていたり、ボランティアが現地に入るまで時間がかかってしまったりとまだまだ課題がある。そういった中で福島など過去に起こったことから学びを得て、未来に繋げていくことが必要だと感じた。

私は今回のプログラムを通して感じたことは二つあり、一つ目は原発事故の影響による「人間関係の変化」、二つ目は「理不尽さ」でした。

一つ目に関しては、原発事故での放射線の恐怖や不確かな情報と混乱による人々の不安からくる偏見や、ソーシャルキャピタルが崩れていくことを、お話を聞いて感じました。特に印象に残った話は元民生委員の渡部さんのお話です。渡部さんが民生委員でやっておられた地域はソーシャルキャピタルが機能し、災害時も地域の中で連携ができ、多くの命を救うことが出来ました。私はこのことから地域のソーシャルキャピタルが構築されていることは災害時に多くの命を救うことに役立つのだということを学びました。一方でそのあとの社会福祉協議会の方のお話を伺うことで、私はとても、もやもやが残りました。その内容は放射線の影響を心配し他の地域へ避難した方が、再び地元に戻ってきたときのこと。「お前は逃げた。」こう言われたことに対して、仮にこの人たちの関係が震災前はいがみ合うような関係でなかった場合、人間関係なんてすぐに壊れてしまうのだということを感じました。震災では地域の中でソーシャルキャピタルが機能している方が多くの命を救うことに役立つと学んだ一方、その人間関係は本当に脆く、長い時間をかけて構築したものも一瞬のきっかけで壊れてしまう。地域づくりの難しさを渡部さんの話を聞いて感じました。



俺たちの伝承館 芸術を通して声を伝える

二つ目の「理不尽さ」については、今回のスタディツアーを通して強く感じました。この言葉に結び付いたきっかけは、最終日の振り返りのことでした。情報を4日間かけてたくさん吸収し、まったくまとまらない頭の中で、「怒り」の感情だけが強く残っていたことを覚えています。それは政府や東電へ向けた怒りでした。しかしそれらをストレートに言葉にするわけにはいかず、何とかたどり着いた言葉が「理不尽」でした。「なぜ福島の人々が被災した側にも関わらず、政府から十分な対応をとってもらえないのか」「政府から早くに支援が打ち切られるのはなぜなのか」ということが頭の中をぐるぐる回り、答えが出ないようなことをずっと考えていました。私がここまで原子力災害に対して理不尽だと感じた理由は、人災であるという点が大きいと思います。自然災害は誰のせいにもできませんが、原子力災害では防げたことがあるはずです。作ったのは人であり、すなわち責任を負うことが出来る人が存在し、怒りの矛先を向けられる存在があるからだと思います。

私たちはたくさんのお話を伺いました。そして被災者がおかれている不利な状況を聞きました。しかしそれらも氷山の一角。掘れば掘るほど理不尽なことはたくさん出てくるのだろうと思います。ツアーの最後に、過去のツアー参加者の卒業生が「理不尽なことってこれから生きていく上で誰しもうる道。」と話されていました。私はこのことを聞いて、これは誰にでも降りかかる問題であることを感じました。理不尽な気持ちにさせられた相手とは人であることが多く、人間関係のしがらみの中で発生する物なのだとしてら起こることは必然なのかと感じました。そういったときどう乗り越えればよいのだろうかと考えた時、私たちは理不尽の中行動を起こしてきた人を今まで見たではないかと思いました。

周りからも反対されたがそれを跳ね返して旅館の中に考証館をつかった里見さん。公的資料館では展示されないことを作品を通して伝えることが出来る俺たちの伝承館。それぞれのやり方で何とか伝えようとする姿がとても印象に残りました。そう考えると私たちは理不尽さの中にある明かりを4日間通してみたのではないかと思います。それは復興の明かりではなく、個人ができることを精一杯やって、伝えようとする思いであり、肌で感じさせてもらったのだと感じました。私たちはその思いを自分たちの中で受け止める。そして伝えることをしなければならない思いを背負ったのだと感じました。



考証館で館長の里見さんのお話を伺う  
公的資料館にはない情報があつた。

福島へ実際に訪れ、東日本大震災と原発事故について多くのことを学び、今まで自分が知っていたのは氷山の一角でしかないと分かった。特に原発事故やその被害についてで、永年続き、例え避難区域が解除されても戻って来ない住民、今もなお続いている風評被害など多くの問題・被害があったことが分かった。また、再生可能エネルギーの話も聞き、日本のエネルギーについて考えさせられた。地震大国の日本、東日本大震災により知った原発事故の恐ろしさ、それなのにどうして政府は原発を再稼働しようとするのか不思議に思った。日本は島国であり、自国でエネルギー資源を確保するのはかなり難しい。そのなかでどのようなエネルギー資源確保が正しいのだろうかと考えさせられた。原発事故について、誰が悪いのかは決められなくとも複雑であると感じた。胸の奥がずっとモヤモヤして苦しく感じた。また、復興とはどういうものなのか、ということも考えさせられた。今まで復興は目に見える・形に現れるモノというイメージだった。しかし、今回のツアーを通してそのイメージは違ふと気づいた。形だけ震災前に戻ってもなかなか住民が戻って来なかったり、人間関係やコミュニティの再生には届かない、精神的苦痛や心の復興もあり、難しいと感じた。そして「復興」は完全に元通りにすることではないと気づかされた。どのような復興が理想なのか、考え続けることが必要だと思う。

今回のツアーで福島のこと、原発事故の被害を学べたことだけでなく、「知る」「伝える」大切さを学べたり、自分自身や見方を振り返ることができた。特に「おれたちの伝承館」「原子力災害考証館」でのお話を聞いて「歴史を伝える」ことに対して考えが改まった。私は歴史学科に所属しており、教職や学芸員を目指していて、その理由がただ歴史の面白さ、不思議さを伝えたい

だけだった。しかし、それだけではいけないと分かった。「歴史を伝える」ということ、それは未来に紡ぐことである。他人事・過去のこととして捉えるのではなく、自分事として受けとめて貰えるように伝えることが大切だと気づかされ、今までの考え方を反省した。伝えるというのは、客観的事実や出来事を伝えるだけではない。その時その時感じた人々の思いを伝えることも重要だと考えさせられた。また、自分が今まで他人事・別世界での出来事という目線をしていたことも気づかされた。今まで歴史を勉強している中、戦争など負の歴史に対して少し避けていたところがあり、その分野が苦手だった。それは自分の中で他人事として認識していたからだと思う。そのことに気づかされ反省した。「今は良くて」という言葉にハッとさせられ、問題意識を持つこと、「知る」って大切だと感じた。「知っている」ではなくて、自ら「知る」こと、そして「知ったこと」を共有し互いに話し合うことが、深く考える契機となると思った。



私が 4 日間の福島スタディツアーで学び、特に伝えたいと感じたことは、「本当の復興とは何か」「知ることの大切さ」の二つである。

復興について、以前まで、崩れてしまった建物や荒れた土地が整備されて元通りになることだと思い込んでいた。しかし、実際元通りになることは無いということ、目に見える復興はもちろん被災された方々の心の復興こそが大切であり、難しくもあるということを感じた。また、そもそも復興とは何を指していて、復興に何を求めているのかは、立場や感じ方・考え方によって人それぞれ異なるのに、それを復興という言葉にまとめて何とかしようとしている現状事態も疑問に感じた。



震災遺構請戸小学校の震災当時のままの教室

2 日目に見た震災遺構の請戸小学校内の展示に、震災から 10 年が経ち、当時の小学生が書いた文章があった。その中には「請戸小が震災前後をつなぐ存在になっている」「地元に戻ってきても実感が湧かなかったが、請戸小を見てやっと帰ってきた気がした」等の言葉が多く見られた。また、3 日目の南相馬のフィールドワークでは昨年避難指示が解除された区域に足を

運んだ。避難指示解除という言葉だけ聞けば、避難生活を終え地元に戻れる人が増えるのではないかとプラスの印象を受けるが、実際は人気もなくまっさらになった何もない土地であり、今の姿を見て地元に戻って生活したいと思う人はいるのだろうかという疑問に思った。



避難指示解除区域の人気のない土地の様子

震災遺構だけを見たときは、被災のありのままを遺しても辛い記憶が蘇ってしまうだけなのではないかと、当時の小学生の方の声に納得できなかった。その後、避難指示解除区域を見て、震災や原発事故をまるでなかったかのようにすべて取り壊してしまうのは本当に良い選択なのだろうか、ありのままの姿を遺しておくことで震災当時の体験や恐怖や悲しみなどの言語化が難しく処理しきれない感情を、震災遺構と重ねることで、次に進もうと少しばかり前を向くきっかけになるのではないかと感じた。

知ることの大切さについて、南相馬市社会福祉協議会の方のお話の中で「人は支え合うことも排除し合うこともどちらもできる」という言葉があり、「正しい情報を知り、それを伝えること」が今の私たちにできることだともおっしゃっていた。知らないということ自体に罪はないし、すべての物事を知ることでも不可能であると思うが、知らないというだけで、無意識に人を排除したり、事実を無視してしまうことは多くあると感じ

た。青田さんのお話では障がいを持った方の避難についてのお話もあったが、障がいを持った方や高齢者がいるということを正しく知っていなければ、中には一人で避難することが難しかったり、避難所生活が現実的ではない人もいるということに気が付き、自分が何か力になれないかと考えることはできない。

そして知ることは、掃部さんのおっしゃっていたコミュニティづくりや対話とも関係してくるのではないと思う。知ることが自分の視野に入れることができる人、意識的に考えられることを増やすことにつながり、誰も取りこぼさないようなコミュニティづくり、自分の意見の押し付けでなく、傾聴する姿勢を持った対話のきっかけになるのではないと思う。

このように、福島スタディツアーの中で、本当の復興とは何か、知ることの大切さの二つについて特に考えさせられた。そして、これらのことを考え続けること、伝え続けることが何より大切で、その方法を模索していきたいと強く思っている。

福島スタディツアーの 4 日間を通して、自分は1人でも多くの人間を救える立場になったと思う。なぜなら実際に目で見てきて、人に伝える事ができるからだ。現地を訪れ、公立とは思えないような設備が備わっていたことが伺える請戸小学校、原発は安全であると思込んでいたというお話、都合の悪いことを隠そうとする公営の資料館など、直接見聞きすることで、原子力の闇を深く学んだ。このことを知った当初は、知らない方がよかったと思っていた。だが、これから伝える悲惨な過去や 13 年経っても安全ではない場所がある現状、過去や現状から学んでの対策を伝えられると気づき、知ってよかったと感じた。福島スタディツアーに参加した私が伝えたいことを下記に2つ示す。

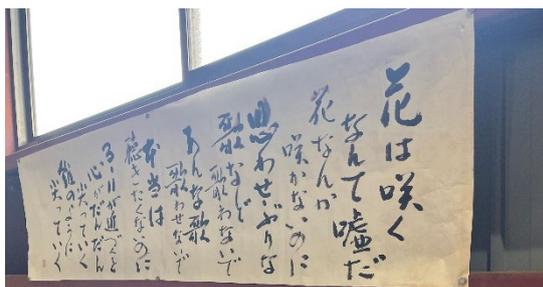
1つ目は福島で東日本大震災を学ぶと複雑な気持ちになり、モヤモヤが残るということだ。私たちもこの災害に関与していることに気づいたからだ。福島は地震や津波などの自然災害と原子力発電の爆発が原因で起こった人為災害の2つが重なった複合災害地である。2つのうち人為災害について考えてほしい。考証館で里見さんから「救助ができない消防士たち」について話を聞いた。地震後に救助活動をしていた消防士たちは助けを求める被災者を救助し続けるが、日没後は捜索することが困難であるため、涙を流しながら「明日助けるから」と声をかけて、その日の捜索を終えた。だが次の日には原発の爆発が原因で救助できない状態になり、消防士も避難するために大型バスに乗らざるをえなかった。原子力発電の爆発がなければ大勢の被災者を救助し、命を救うことができたはずだった。また同じ境遇で助けることができなかった木村夕凧さんと深雪さん、王朗さんの話も聞いた。木村夕凧さんは当時小学1年生で、今頃は大学生になっているはずだった。早めに救助できたら

命を落とさずに済んだのに原発事故が原因で捜索が遅れ、見つかったのは遺骨の一部で5年9ヶ月後でした。生きる権利があるのに人の手によって殺されたと言っても過言ではない人為災害は、つらすぎて正直今も言葉に表せない。原子力発電は多くの電気を作り、私たちに便利な生活を提供してくれる。電気の便利さを知った私たちの欲が原子力発電であり、電気を節約することはできるが完全に使わないようにすることはできない。これは私たちの問題でもあり、複雑な気持ちにもなる。

2つ目は、福島は原子力発電の餌食となったが今度は再生可能エネルギーの餌食になろうとしていて「繰り返し」が起こる可能性があるということだ。俺たちの伝承館で聞いた「過去をしつかりと見て未来につなげる」という言葉を前提として考えると、再生可能エネルギーは地球にとってメリットであるのかと疑問がわく。特定非営利活動法人うつくしまランチの掃部郁子さんに話を聞いた。現在福島は太陽光発電が普及して山を削って設置している所もある。削ったことによつてのどかな景観が損なわれる事態になり、さらに土砂災害のリスクも上がった。ここで土砂災害が起これば、これは人為災害ではないだろうか。安全かどうかもわからないまま、太陽光発電を乱立させるのは本当に良いものであるのか。人為災害が「繰り返し」起こらないためにも再生可能エネルギーの是非について考えるべきである。

この地震はたまたま東日本に起きたのであって、次はどこで起こるかかわからないことをわかってほしい。

私は福島を訪れる前は、13 年経った福島は復興も進み、避難区域が解除され、人が住める状態になっていると勝手ながら想像していました。3月11日になると震災地域の特集やニュースなどが増え、一年経つごとに良い方向に復興が向かっているという印象を受け、他人事のような気持ちになってしまっていました。実際に福島を訪れて、復興が進んでいる面も視ることができました。年々避難指示が解除される地域が増え、住める場所も広がりました。しかし、避難指示が解除された地域に戻ってくる地元住民は少ない印象を受けました。地域の近所付き合いが減り、戻ってきても孤立した方もいるとお聞きました。物理的な復興は進んでも、被災者の心理的な復興は進んでいないと感じてしまいました。私は、当時の震災の記憶がほとんどなく、動画やニュースでしか震災に触れることがありませんでした。東日本大震災を想像すると地震や津波が頭に浮かびますが、原発に関する知識が無く実際どのような影響があったのか知りませんでした。今回原発について私は自分事して考え、多くの課題があると感じました。



震災の当事者にしか分からない当時の「生きる」ことの困難さを表している作品だと思う。

原子力災害考証館 Furusato の里見さんのお話で印象に残っていることは、苦しんでいる人が声を出せない状況にいることです。考証館の取り組みが福島の風評被害に繋がってしまうと言われたと里見さんがおっしゃっていました。

メディアによる復興が進んでいるという表の一面しか視聴者には見えてないかもしれないが、復興している部分の裏で全く住めない場所がたくさんあることを、たくさん目にしました。人災を伝える資料館として他人事ではなく自分事として捉えてほしいという里見さんの思いを感じることができました。原発事故で救えなかった命、故郷を離れて暮らす被災者がいるという事実を踏まえて原発放射能の影響を後世に伝えていくことの大切さを痛感しました。



福島県双葉郡大熊町の写真。福島第一原子力発電所の爆発事故のあった町でもあり13年経っても立ち入ることができない場所です。

また、南相馬市社会福祉協議会の方々と渡部美智子さん、青田さんとの対話で、福島で起きたことの「モヤモヤ」を感じました。賠償金・避難した人への差別・いじめ、子供の被曝など複雑な問題が絡み合っている現状を知ることができました。表に発信する難しさとともに苦しんでいる人が沢山いることを風化させてはいけなそうと思いました。

私は福島で二つのことを学びました。一つは、正しい情報を正しく伝えることです。私自身も今回福島を訪れていなければ、福島の今を知ることなく、人も住めるようになっていたと思います。メディアの情報をそのまま鵜呑みにするのではなく、何事も自分で正しい情報を掴まなければならないと考え

させられました。もう一つは、人との繋がりを大切にしていくことです。福島の方々との出会いで感じたことは、お互い支え合いながら生きているということです。この13年間、もやい直しをすることで互いに心のケアをしながら命を繋いできたからこそその気持ちの強さ、覚悟というものを肌で感じました。

私はこの福島で感じたことを誰かに伝え続けていくことも一つの復興支援の形であると思います。みなさんが私たちに伝えてくださいましたが、思い出すことの「辛さ」「難しさ」もある中でこの震災・原発を忘れてはいけないという真心がこもっていました。次は私たちが福島で学んだことを伝え続けていかなければいけません。うつくしまランチの掃部さんのおっしゃっていた「対話」をすることで、震災を経験していない私達でも、少しでも震災・人災について自分事として考え続けるとともに自分の考えを大切にしていきたいです。

この福島スタディツアーは一つ一つのお話、訪れた場所全てが色濃く、強く印象に残った。今後自分自身が災害についてはもちろん、これからの人生において起こる一つ一つの出来事について深く考えて過ごしていこうと自分を見つめ直す大変良い機会にもなった。

福島を訪れ、特に印象に残った場所は 2 日目の請戸小学校である。この請戸小学校の奇跡のエピソードは前々から知っていた数少ない東日本大震災関連のエピソードであった。実際に訪れてまず印象に残ったのは、津波の被害を受けた建物や機材がほとんどそのままになっていることだった。津波の被害をより強く感じる事が出来た。また、ここに来るまでは、迅速に避難して全員助かったという漠然としたことしか知らなかった。展示を見て、避難する際に教頭先生は最後まで学校に残ったことや、大平山から役場へ避難する際、トラックの荷台に乗せてくれた業者がいた等、初めて知ったことが多かった。これらのどれかが欠けていたら奇跡のエピソードはなく、また違った展開になっていたのだろうと思う。



請戸小学校にて津波で積み上げられた機材

また終盤で見た「あなたにとっての大平山は？」という問いかけに私の住んでいる地域には津波等から避難が出来る山がないため、なかなか思い浮かべることが出来なかった。

請戸小学校に関わる一人ひとりが周りの環境について理解し、迅速な対応が出来たことの凄さを痛感した。このことから人々が自分達の住んでいる地域の環境について知ることの重要性を学んだ。私みたいに「あなたにとっての大平山は？」という問いかけに思い浮かばない人もたくさんいると想定できる。それを踏まえ、これから災害に関して伝えていくにあたり、一番伝えていきたいことは、自分たちが住んでいる地域について把握するという基本的なことではないかと思った。

もう一つ強く印象に残ったのは、4 日目に訪れた富岡町である。富岡町は去年の三月に帰還困難区域が解除されたが、更地があまりにも多いことに驚いた。この場所でお話を聞いたからこそ、原発事故によってこの町を離れなければならなかったこと、家を解体するか残すかの決断を短期間で迫られることの重大さ、虚しさをより強く感じた。この富岡町の光景は、震災が日常にもたらした目に見える被害と心の被害の両方を強く感じさせるものだった。その中でも家を残す決断をした人、帰還困難区域が解除されて新しく家を建てた人、公営住宅に住み、もう一度この町で暮らそうとする人もたくさんいることを聞いて、それぞれの形で復興に向かってステップを踏んでいるということを感じ取ることも出来た。

私は今回のスタディツアーで学んだことはもちろんだが、この福島での事故においての闇の部分や、話を聞かせてくださった方々から感じ取った光の部分、実際にこの地に来て感じ取った福島の大変さ等について、自分の言葉と考えをしっかりと深掘りしてまとめたいと私は思う。

今回の福島スタディツアーで私が学んだことは大きく分けて二つある。一つは「正しい情報を正しく伝えることの大切さ」、もう一つは「物事を多方面から見ることの必要性」である。

「正しい情報を正しく伝えることの大切さ」については実際に震災を体験した方のお話を聞き実感した。震災時に正しい情報が伝わらなかったことで「よくわからないまま避難して家族もばらばらになってしまった」「原子力発電や放射能についての誤解によって学校でいじめや差別を受け、つらい思いをした」など、情報不足による悲しい出来事があったと聞き、緊急時には正しい情報がとても大切になってくると実感した。人との繋がりの薄さにより情報が伝わらなかったり、逆に人との繋がりによって起きた差別があったりしたことも知り、そこでもまた正しい情報が大切になってくると感じた。また、原子力発電について震災前は「明るいエネルギー」と謳い、いかに安全かという事だけをアピールしており、事故のリスクはほとんど知らされていなかったという事も知った。原発事故は事故の恐ろしさに関する正しい情報が伝わっていなかったから起こってしまった人災なのかもしれないと感じた。震災というと地震や津波、原発事故をまとめて考えがちだが原発事故は人災であり自然が引き起こす災害とひとくくりにするべきではないと今回多くの情報を知って感じた。



一時間ごとの放射線量を測定するモニタリングポスト(富岡町)

「物事を多方面から見ることの必要性」については、ツアーで回った公的、民間の伝承館をそれぞれ比べ、その違いから情報の切り抜き方による受ける印象が大きく異なることから気がついた。公的な伝承館では復興の前向きなところや、上辺の情報が多く復興が進んでいる印象を受けた。民間の伝承館では人々が受けた心の大きな傷や心の叫び、復興とは何かを問うようなものや公的伝承館では扱われない震災の闇についての展示もあり、震災についてより深く考えさせられるような印象を受けた。公的伝承館と民間の伝承館の両方行かなければ理解できないこともあり、物事を様々な方面から見て理解することは必要なことだと強く実感した。



請戸小学校二階に展示されていた黒板。住民や卒業生の方々の地域や学校に対する思いが綴られています。

私は、福島スタディツアーに参加するまでは震災をどこか遠いところの出来事、他人事だとらえている部分が大きかった。そしてテレビなどで震災関連の情報を見ただけであたかも知った気になっていた。だが、実際に現地に行くと知らないことの方が多く、自分がいかに震災について知らなかったか気づかされた。テレビやネットなどの情報を鵜呑みにしてしまっており、鵜呑みにしてしまっていることにさえも気が付かない怖さがあると感じ、自分もそうなっていること気が付いた。伝えることで風評被害をなくしていくことが出来るが、伝え方が悪

いと逆に風評被害を広めてしまったり、被災者の方を傷つけてしまったりする事にもつながってしまう事も知り、「伝える」ことがいかに難しいかという事も実感した。そしてなるべく偏りのない正しい情報を正しい形で伝えたいと思った。今回の経験を踏まえ、正しい物の見方を身につけられるよう努力し、また正しい情報を伝え、少しでも偏見や差別をなくしていきたいと思った。

## 龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<https://www.ryukoku.ac.jp/npo/>  
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67  
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5  
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261